

国勢調査員の現場から

ご存知のように先月上旬から国勢調査が始まっています。調査員♂は全国で約70万人。その一人として現場で感じていることを少し綴ってみます。ただし調査員には守秘義務が課せられているので、限られた範囲での報告です。

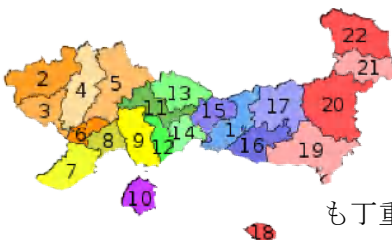
まずは地元市では調査員がなかなか集まらなかった。調査員には報酬も出ます。地域によって異なるかどうか知りませんが、私の担当区では、1調査区50世帯の場合36,600円。時間の都合がつく人にはそれなりのよい“仕事”だと思っておりますが、なり手がいない原因の一つは、なかなか調査対象者に会えないことでしょう。

今回からインターネットによる回答が採用され、9月10日からそのための調査書類を持って自分の担当地区の全戸訪問をしました。1回目で会えたのは3分の1。不在の場合、最低3回以上の訪問が求められています。26日からはインターネットで回答しなかった世帯（ネット回答者は約30%、全国平均は36.9%）を対象に、従来の紙の調査票（マークシート）を配りながら回答を依頼に行きましたが、ここでもなかなか会えない家が多かったのです。

それと訪問相手の反応でしょう。私も男性高齢者の何人かから、ずいぶんつけんどんな言葉投げかけられました。一人はドアを開けずに扉越しの会話。最初に世帯の構成人数を確認しなければいけないので尋ねると「そんなことは答えてくないね！」と。こんな事情から人と話すのが苦手な人は、調査員の仕事を敬遠するのかもしれない。

一方で、ある高齢の婦人は「ごくろうさまですね。コーヒーでも飲んでいきませんか？」と声をかけてくれました。「ありがとうございます。でも今、各家庭を訪問中ですので」と遠慮すると「じゃあ、この缶コーヒーをどうぞ」なんて・・・。

家の玄関に名前のない人が多いのにも驚きました。東京郊外の団地のマンションの1棟で100世帯ほどですが1割以上が表札に名前を入れていないのです。これは、ふだん市報を配っている築5年ほどの新築マンション郵便受ポストも同じ傾向です。半数以上が名前を表示していません。郵便屋さんのご苦労が偲ばれてきます。個人情報、個人情報と誰もが口に、必要以上に大袈裟なくらいに反応しているように私には思われるのです。30年前くらいまではもっとオープンでよかった。



こんなこともありました。調査でお邪魔した家がたまたま自治会の責任者で「住んでいる人の実態がわからない。国勢調査の結果を教えてくださいませんか・・・」と。私は「目的外使用になるので申し訳ありませんができません」と、立場と事情をわかりながらも丁重にお断わりしました。

名前を伏せている——女性の一人住まいの場合は理由も推測できます。一方で「周囲とはお付き合いや関係を持ちたくない」「声をかけられる煩わしい世界から逃れるためにドア一つで遮断される団地に来た」と、自分だけの世界に閉じこもろうとする人もいます。地域共同体とか防災のために近所づきあいの大切さが訴えられている中で、だんだん社会が閉鎖的になっていることが気になるところです。

10月からは「調査票の提出状況の確認と回収」「不在世帯への対応」「確認状、督促状の配布と未提出世帯からの回収」等々、22日の調査書類の最終提出日まで“仕事”は続きます。

(グラフと地図のイラストはイメージで、今回の調査とは関係ありません)

